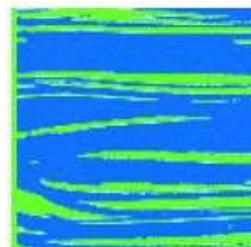


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2017年 冬号 No.85 (2017年2月1日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

第24回行動数理研究会開催のご報告……………佐伯 大輔
僧伽, 行動分析学という結縁……………渡辺 修宏
シチリア旅行記またはヨーロッパ行動分析学会のススメ……………吉野 俊彦
〈自著を語る〉 ウィリアム・M・ボーム著 / 森山哲美訳
『行動主義を理解する—行動・文化・進化—』の紹介……………森山 哲美
編集後記……………ニューズレター編集部

第24回行動数理研究会開催のご報告

佐伯 大輔 (大阪市立大学)

第24回行動数理研究会が、日本行動分析学会年次大会最終日の翌日(2016年9月12日)に、大阪市立大学梅田サテライトにて行われましたのでご報告します。今回は、午前には1件の教育セッション、午後には3件の研究発表が行われました。

午前の教育セッションでは、神前裕先生(慶應義塾大学)に「オペラント学習における連合過程とその神経基盤について」というタイトルの講演を行って頂きました。講演では、「反応の結果が先行刺激と反応の間の連合を強める」とするS-R理論と、結果の予期によって説明する期待理論の2つによって個体の学習が説明できるとする2過程理論が提案され、動物を対象とした多くの先行研究の結果が、この理論によっ

てどのように説明されるかが、豊富な研究例を挙げて解説されました。さらに、2過程理論のASDやセルフ・コントロール等の問題への応用可能性について展望がなされました。

午後の研究発表の1件目は、古野公紀先生(明星大学/帝京大学)による「ハトのつつきオペラントにおける空間的次元の実験的分析」というタイトルの発表でした。発表では、タッチパネルを用いてハトのつつき反応を記録する実験において、反応位置が、FIスケジュールやVIスケジュールの値によってどのように変化するかを検討されました。また、空間統計学に基づく分析により、反応位置データの数量的分析が行われました。その結果、反応位置は、FI値の増加に伴って反応可能領域の外側に向かう傾向が

見られたのに対し、VI ではそのような傾向は見られないことが明らかになりました。反応位置という新たな反応次元における行動測定・予測を導く可能性が示されました。

午後の研究発表の 2 件目は、中村達大先生 (常磐大学) による「ペダル踏み反応と餌呈示の依存関係がニワトリのヒナのキーつつき反応の獲得とペダル踏み反応の復活に及ぼす効果」というタイトルの発表でした。発表では、ニワトリのヒナを対象に、ペダル踏み反応に対する依存的・非依存的な餌呈示が、自動反応形成によるキーつつき反応の獲得と、その後のペダル踏み反応の復活にどのように影響するかが検討されました。その結果、ペダル踏み反応に依存して餌を呈示された群では、他の群よりもキーつつき反応の獲得が促進されたことや、ペダル踏みの復活はどの群においても生じたことが明らかになりました。

午後の研究発表の 3 件目は、井垣竹晴先生 (流通経済大学)・Paul Romanowich 先生 (University of Texas San Antonio)・坂上貴之先生 (慶應義塾大学) による「非合理的選択研究の展望 — 行動分析学と行動経済学をつなぐもの—」という

タイトルの発表でした。発表では、行動経済学、行動分析学、行動生態学における非合理的選択に関する研究についてこれまでの研究の紹介、未解決の問題の整理、今後の展望がなされました。主なトピックとしては、選択のパラドックス、準最適選択、魅力効果の問題が議論されました。これらの非合理的選択は、各研究領域において提案されてきた規範的理論 (効用最大化、強化最大化、最適採餌) に対する反証としての側面を併せ持っていることが指摘されました。さらに、これらの非合理的選択は、何らかの点で合理的な観点から検討可能である可能性が示唆されました。

各講演・発表後の質疑応答では、話題提供者と他の出席者との間で活発な議論が行われ、発表テーマにおける今後の指針が提案されるなど、大変有意義な研究集会となりました。なお、このたびの研究会運営に対して、日本行動分析学会より補助金を支給して頂きました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

これまでの講演記録は、以下の行動数理研究会のホームページでご覧になれます。

<https://sites.google.com/site/jpsqab/>

僧伽，行動分析学という結縁

渡辺 修宏（水戸看護福祉専門学校）

サンスクリット語の *samgha* は一般的な「集団」や「組合」を意味しますが、仏教の出家修行者によって形成される「組織」のみを指す場合があります。漢訳仏典は、この語を「僧伽（「さんが」）、もしくは「さんぎゃ）」と音写して使用しています。私たちにとって身近な年中行事や生活習慣は仏教から多大な影響を受けていますので、僧伽という言葉をごどこか聞いたことがある人は少なくないのではないのでしょうか。僧伽、それは、人格完成を目指して厳しい修行に明け暮れる仏教徒たちの集まりのことです。仏の道を求める者たちは自ずと僧伽に集い、僧伽とともに悟りを目指すのです。

ところで、私が普段お世話になっている常磐大学森山哲美研究室、そして、常磐大学動物心理学実験棟（通称、動物棟）は、行動分析学を中心に科学を学ぼうとする者たちに広く開かれております。元々基礎研究者であられる森山先生がこの動物棟の実質的な管理者ですので、そこにはハト、ヒヨコ、ハムスター、金魚、そしてコックローチなどの実験動物が実験者の来訪を待っているのです。そして、少し極端な言い方かもしれませんが、学びたい！という想いがある者に対して、森山研究室および動物棟はいつでも *welcome* などどころです。

常磐大学の学部生・院生はもちろん、地域の社会人、さまざまな専門職、国内外の他大学からの学生・研究者が季節を問わず、森山研究室と動物棟を訪れます。当然、基礎研究に全く縁もゆかりもない来訪者も少なくありませんから、必ずしも基礎研究、あるいは、動物実験に限った研究がそこでなされるわけではありません。来訪者の興味や関心、その方々のこれまでの様々な経験に基づき、それぞれの純粋な問題意

識に即した研究がなされているのです。したがって、森山研究室と動物棟に出入りされる方々は、時々、それぞれの専門性をよく理解しない（できない）ままに研究協力することがあります。もしかしたら、それぞれがバラバラに好きなことをしていると揶揄されるかもしれません。しかし、そうではないのです。

森山研究室と動物棟に出入りする方々は、いわば僧伽の絆によって関係しあっているのです。研究によって新しい知見を得る営みは、悟りを目指して修行する仏教徒の姿そのものです。研究が息詰まって悩み苦しむ姿は、まさに修行の苦しみです。研究に迷い、挫折する時があれば、厳しく、そして思いやり深くお互いに励まし合い、再び研究に取り組むのです。それぞれが、それぞれの立場で、それぞれに必要な修行という研究をしているのです。

例えば、社会学部出身の元ソーシャルワーカーである私は、実験演習はもちろん、心理学すらもまともに学んだことがありませんでした。しかし、行動分析学に興味をもった私を、この僧伽は快く受け入れてくれました。そして、私は自身の臨床経験に即して行動分析学を学ぶことができました。もちろん、それは今も続いております。もし、森山研究室と動物棟で学ばれる方々が僧伽でなかったら、きっと私は、今日まで行動分析学を学ぶことはできなかったでしょう。また、行動分析学を学ぶことを通して得られる、ヒトや動物の生の営み、社会の仕組み、世の中の真理を知ることの奥深さや感動を体感することはなかったでしょう。つまり、この僧伽は、学びたいという意欲（つまり研究行動）の先行条件であり、強化刺激なのです。

自身の研究行動の維持（と発展）が図れるのな

らば、僧伽はかけがえない環境といえるでしょう。このニュースレターも、もしかしたらそのような僧伽と成り得るのではないのでしょうか？

シチリア旅行記またはヨーロッパ行動分析学会のスヌメ

吉野 俊彦（神戸親和女子大学）

1 シチリア：魅惑の三角形

シチリアという何をイメージされるだろうか。名前に聞き覚えはあっても場所がはっきりしないという方でも、あの長靴に蹴飛ばされる三角形の島と言えば合点してもらえらるだろう。歴史が好きなら数々の世界遺産に象徴される様々な文明の交錯した島として重要な位置を占めている。音楽が好きであればAスカララッティとベッリーニ、ディ・ステファノ、アダモ、シチリア舞曲、映画好きなら山猫、ゴッド・ファーザー、ニューシネマパラダイスにグラン・ブルー、名産品ならワイン、オリーブとレモン（今回初めて知ったのだがサボテンが至る所にあり、しかも実が食用!!）、さらにはエトナ山、町ならパレルモ、カタニーヤ、シラクサあたりなら一般にも知られているだろう。ユーリカ（エウレカ）と入浴中に叫んだとされるかのアルキメデスもシチリア第3の町シラクサ生まれだそう。

2016年9月14日から4日間の日程で開かれたヨーロッパ行動分析学会第8回大会に参加した。その場所が三角形であるシチリア島の重心

にあるエンナ Enna という古い町だった。1996年に開学というから歴史豊かなシチリアでまだ20年のエンナ大学 Università Kore di Enna がその会場。案内の写真にあった天空の城か要塞かと思ふ町の様子に魅せられ（Fig 1）、本務校の業務などとも幸い重ならず、4回目の参加ができた。実はその写真の町はエンナでなく、そこから見えるカラシベッタ（Calascibetta）という町だし、大学はエンナの旧市街から山を下ったところにあったのだがそれはまあそれとして（Fig 2）。

調べてみるとシチリアにはエンナ以外にも数校の大学があり、最も古いカタニーヤ大学は1434年の創立である。それでもイタリア国内で16番目に古いだけというからイタリアの学問の歴史は推して知るべし。エンナ大学の一つ前に創立されたのはパレルモ大学で1806年というから、200年近く新しい大学が生まれなかったというのもその長い歴史を誇るイタリアの学問のもうひとつの顔なのだろう。



Fig 1 エンナの町から臨むカラシベッタ



Fig 2 エンナ大学から見上げたエンナの町

しかしその重心あるいはへそにあたるエンナの様子をネットでは十分にわからなかった。カタールまたはパレルモまで飛ぶのはよいのだが、島の中を走っている鉄道やバスの様子が今一つ掴めない。大学と町中との距離や標高差も画面上では何となくしかわからない。結局同行した共同研究者である山下博志先生（大阪学院大学）の運転でカタールからレンタカーという噂に聞くイタリアの運転事情を考慮すると無謀とも言える計画を立て、宿から大学だけでなく、小さくはないシチリアもピンポイントではあるがいくつか巡ることもできた。大会会期後のパレルモへの道すがらカリフォルニアにいるのかと勘違いしそうな荒涼とした景色が続く、緑豊かな島という想像とかけ離れていたのは、6 月くらいから 3 ヶ月近く続いた乾期の終盤ならではあったようである。ジブラルタル海峡を除くと、ヨーロッパとアフリカとが最も近いのがこのシチリアとチュニジア間のシチリア海峡であることを改めて地図で眺めて感心したり。また違う時期に訪ねてみたい魅力に溢れるシチリアである。

2 学会：小さいながらも

さて、肝心の学会の話をもっと統計から。大会後に関係者から送っていただいた資料によると、予約参加総計は 28 ヶ国から 309 名。当日参加数は詳らかでないが、受付の様子ではその数は

国別参加者数 (Top10)	
イタリア	50
イギリス	41
アメリカ	38
アイルランド	32
ノルウェー	25
アブダビ	23
ブラジル	21
ギリシャ	14
スペイン	10
NZ	8

多くなかったように見える。2016 年度の我が行動分析学会第 34 回大会では予約 191 名、当日 226 名であったから合計数では上回っているが、予約数は 1.5 倍を数えたことになる。国別でのトップ 10 を Table 1 に示した。地元のイ

タリアを別にとすると、イギリス（ウェールズが 21、北アイルランドとイングランドがそれぞれ 10）、アメリカ、アイルランド、ノルウェーあたりが毎回参加者の多い国である。それでも規模も数も本家の ABA とは比ぶべくもない。

次に 6 件の基調講演などを別として、発表件数を行動分析学の 3 本柱である理論、実験、応用別に Table 2 にまとめた。これによると、明らかに口頭発表がメインであることがわかる。ポスター発表の件数は前々回、前回よりも減っており、その時間帯も口頭発表などのセッションが終了後の、ディナーに出かける前の短いものだった。英語での口頭発表に抵抗がある日本人だと少しハードルが高くなってしまいうだろうし、一方でポスターにしてしまうと多くの聴衆を得られない危険性が生じてしまうかもしれない。私たちはポスター発表だったのだが、在外研究中の 2 月に後述するアテネのメロン（と書いてしまうと何のことか）と、彼の研究室からの参加者が発表を聴きに来てくれた。それ以外には数名であり、成果の得られた発表と言うには憚られるものだった。

領域別発表件数					
	計	ABA	EBA	理論	その他
口頭発表	77	51	19	4	3
シンポジウム1	58	32	16	5	5
ポスター発表	34	23	7	1	3
シンポジウム2	10	7	1	1	1
計	179	113	43	11	12

規模としては小さいながらも、魅力的なプログラムが準備されていることは事実である。テーマなどより詳細については、ヨーロッパ行動分析学会のホームページ上にあるプログラムを参照されたい（2017 年 1 月 7 日現在）。また、4 件の基調講演を含む、大会の様子をネット上で見ることができる（<https://twitter.com/AbaEuropean>）。

口頭発表が中心であるのはこのヨーロッパ行動分析学会だけでなく。毎年イースターの時期にユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) で開かれる EABG (Experimental Analysis Behaviour Group; イーバグと読む) も口頭発表だけである。ちなみに、行動分析学がそれほど盛んでないイングランドにおいて、EABG の第 1 回が 1963 年に開催されていたというからすでに 50 年以上の歴史を重ねているというのは意外な事実である。

前述のメロン (Robert Mellon) から興味深い話を聞いた。彼は現在アテネのパンテイオン大学で教鞭を執っているのだが、私と同年の、ノースカロライナ大学で学位を取得したアメリカ人である。ブラジルに行動分析学を広めた Fred Keller に影響されて、たまたまポジションのあったアテネに行動分析学を広めるべく着任したとのこと。祖先がギリシャ人というわけでもなく、特に親しい人がいたわけでもなく、さらにはギリシャ語も話せないままだったという。現在はギリシャ語で行動分析学の教科書を書き (ちなみに財政破綻したギリシャだが、現在でも大学の学費は無料で、その教科書も無料で配布されるそう)、小さいながらもハト用の実験室も備えた拠点を築いている。私が以前より彼に注目している理由は、そうした基礎研究と臨床との接点を強く意識しているためである。ニューヨークのベルビュー病院を含むいくつかの臨床経験を踏まえて、強迫性障害などの精神病理学的な問題行動をハトやヒトを対象とした実験で研究しており、同時に数多くの学生を研究者、臨床家として育てている。私の博士課程でのスーパーバイザーであった Phil Reed (現在はウェールズ大学スウォンジー校) や Simon Dymond (同)、そして行動分析学ではないが Graham Davey (サセックス大学) など、臨床を意識した実験的研究において刮目すべき研究者がヨーロッパにもいるように感じる。

3 ヨーロッパ行動分析学会のススメ

さて、そんな大きくはないヨーロッパ行動分析学会であるが、もともとヨーロッパの文化や歴史に関心がある私にはとても魅力的な学会である。これまでの大会の開催年月と場所を Table 3 にまとめた。

2003年07月	パルマ (イタリア)
2005年09月	グダンスク (ポーランド)
2007年07月	ミラノ (イタリア)
2008年09月	マドリード (スペイン)
2010年09月	レティムノ (ギリシャ・クレタ島)
2012年09月	リスボン (ポルトガル)
2014年09月	ストックホルム (スウェーデン)
2016年09月	エンナ (イタリア・シチリア島)

今回に限らず、これまでもホテルやいわゆる国際会議場を会場としたり、開催を担当する大学に行動分析学を専門とする教員や研究者がいる・いないに関係なく場所が選ばれたり、さらにはニューズレターで開催担当を呼びかける案内があったり、どのように決定されているのかについて外からは知ることが難しい。それだけが理由ではないのだろうが、これまでは次回大会の開催は時間的に遅くなってからしか発表されなかった。また発表や参加の締切も、我が行動分析学会に比べるとずいぶんと余裕があるように見える。

そうした文化が根付いているように見えたヨーロッパ行動分析学会であるが、beemail でもお知らせしたとおり、次回大会は 2018 年 9 月 18~22 日にドイツのヴェルツブルクで開催されることが早くも決定している。ここにもまた行動分析学を専門とした研究者がいるように見えないし、ヨーロッパが誇るコインブラ・グループのひとつであり、1402 年に創設されたユリウス・マクシミリアン大学ヴェルツブルクでなく、1971 年創設のヴェルツブルク・シュヴァ

インフルト応用科学大学がその会場なのだが、ドイツのハブ空港であるフランクフルトの近く、そしてシチリアにおけるエンナ同様に、ドイツのヘソに位置する古い町で開催される。ヨーロッパの9月、うまくすればオクトーバーフェストも始まっているし、そんな発展途上にあるヨーロッパ行動分析学会への参加をぜひ呼びかけたい。

ついでにもうひとつ。興味深いサイト (<http://thetruesize.com/>) を紹介したい。日本が意外に大きいこと、そしてヨーロッパがいかにか小さいかを、私もこのサイトで実感した。そしてそんな小さな地域に実に多様な民族が暮らし、異なる言語が語られていることの面白さと不思議さをヨーロッパで感じることができる。大会の公式言語は英語だが、いわゆるアメリカ英語とは大きく異なる（もちろんイギリス英語とも異なる）それぞれの土地なまりの英語を聞くと、日本語なまりの英語にちょっとだけ自信が出てくるそんな大会でもある。

4 終わりに

2015年11月に起こったパリでの大規模テロの後、2016年1年間でパリを訪れた観光客は前年比で6%減少した。イギリス Independent (2017) によれば、ルーヴル美術館への入場者は国内外全体で20%減少。興味深いのは、アメリカ人が減少しなかった一方で、中国人31%、ロシア人47%、そして日本人は61%減少したのだ

そうである。ちなみに、「羹に懲りて膾を吹く」の英語表現は *A burnt child dreads the fire*. つまり、「火傷した子どもは火を恐れる」という単なる正の弱化的なのだが、日本語表現だと極端な一般化を意味しているように見える。Dinsmoor (1977) を持ち出すまでもなく、弱化的は当該の反応を抑制するだけでなくそれ以外の反応を強化する、つまりパリでのテロはパリ以外の選択肢の強化価を相対的に上げる働きもある（尤も反応と独立した嫌悪刺激の定時に過ぎないのだけれど）。その効果の大きさが国によって異なるということなのだろうか。注意深くあることは大切だが、体験の回避が生じないように、実際には働いていない随伴性（ルール）によって過度に行動が制御されないように、そして何よりテロの暴力によらない収束を願ってやまない。

引用文献

Dinsmoor, J.A. (1977). *Escape, avoidance, punishment: where do we stand?* *JEAB*, **28**, 83–95.

Independent (2017). *Louvre blames 2 million drop in visitors on terrorism fears*. <http://www.independent.co.uk/arts-entertainment/films/news/louvre-paris-art-gallery-terrorism-fears-2-million-visitor-numbers-2016-a7516126.html> (2017年1月22日確認)

〈自著を語る〉

ウィリアム・M・ボーム著/森山哲美訳

『行動主義を理解する—行動・文化・進化—』の紹介

森山 哲美（常磐大学）

昨年（2016年）9月に二瓶社から『行動主義を理解する—行動・文化・進化—』と題して、William Baum 著の“*Understanding the behaviorism: Behavior, culture, and evolution*”第2版の邦訳書を上梓しました。日本行動分析学会会員の皆様におかれましては、ぜひお手にとってご高覧いただければ幸いです。



Baum 博士は、B. F. Skinner の著書よりもっとわかりやすい現代的な行動主義を説明する目的で初版を著したとのこと。第2版では、Baum 博士自身の巨視的な行動主義のスタンスが強調されています。行動分析学の哲学的基盤である徹底的行動主義はもとより、Darwin の進化についての理論、行動生物学（エソロジー）や進化生物学、政治学や社会学といった社会科学の視点なども紹介されており、それらとの関係で、科学の哲学としての行動主義が解説されています。社会における人間の行動にいたっては、自由や幸福、公平や平等、さらに政治や文

化に関する問題が、現代の行動主義によってどのように説明できるのかが懇切丁寧に述べられています。

私が、Baum 博士の著書を翻訳したいと思った理由は、原著が素晴らしい本であるということ、そして、行動分析学とは一体どのような学問なのか、行動を理解するということはどういうことなのか、行動の科学は可能なのか、といった行動に関わる根本的な問題について、我が国の行動の研究者や実践家の方たちと改めて考えてみたいと思ったからです。さらに、行動分析学に対する周囲の誤解も払拭したいと思ったからです。

訳し終えて思ったことは、誤訳をしていないだろうか、訳書が原著の内容を正確に伝えているだろうか、読者にわかりやすい本になっただろうか、ということです。私の訳書に読みにくさや誤訳があるとしたら、それは訳者である私の至らなさによるものであって、決して原著者の問題ではありません。読者の皆さんには、そのような表現にお気づきになられたら、ぜひお知らせくださるようお願いしたいと思います。なお、各章末の参考文献の中で邦訳されているものがあれば、できるかぎりそれらについても紹介しました。この訳書によって、我が国の行動の研究者や実践家の方々が、行動分析学はどのような学問で、何を志向する学問であるのか、それについてあらためて考えていただければと思います、拙訳書を紹介させていただきました。

編集後記

2017年を迎え、最初のニュースレターの発行となります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今号では行動数理研究会のご報告(佐伯先生)を掲載いたしました。また渡辺先生には、先生と行動分析学との関わりを僧伽の観点からお話

し頂いた記事、吉野先生には興味深いデータをもとにヨーロッパ行動分析学会の紹介記事をご執筆いただきました。さらに森山先生には著書のご紹介をしていただきました。年末年始のお忙しい時期にも関わらず、ご執筆いただき、誠にありがとうございました。(KK)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

● ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25

日本大学大学院総合社会情報研究科

日本行動分析学会ニュースレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp